

[国語]

○ 実施時間 【8:30~9:20】(50分)

○ 次の注意をよく読んでおくこと。

- (1) 「始め」の合図があるまで問題用紙を開かないこと。
- (2) 問題は □ ~ ▣、17ページまであります。
- (3) 答えはすべて解答用紙の解答らんにはっきりと、ていねいに書きなさい。
- (4) 答えを直すときは、きれいに消してから書きなさい。
- (5) 内容に関する質問は受け付けません。
- (6) 気分が悪くなったり、トイレに行きたくなったりしたら、手をあげて監督の先生に合図しなさい。かんとく
- (7) 「終わり」の合図があったら、直ちに筆記用具を置き、解答用紙が回収されるまで待っていなさい。
- (8) 解答上の注意
 - ・字数指定のあるものは、句読点〔。、〕および「」や〔〕なども一字と数えること。なお、一マスには一字しか入れられません。
 - ・文末表現は、「こと」、「から」など、問い合わせにふさわしい形にし、文の終わりには句点〔。〕をつけなさい。

受 験 番 号		氏 名	
------------------	--	--------	--

一 次の――のカタカナを漢字に改めなさい。

① 今はゼキセツの可能性がある。

② ボセキに文字を刻む。

③ センモン的な勉強をしたい。

④ 信頼関係をキズく。

⑤ 親切にしてもらったオングがある。

⑥ 平安時代のキヅクの生活について調べる。

⑦ 引っ越しにともないテンコウの手続きをする。

⑧ 草木のメが出る。

⑨ 考え直すヨチがある。

⑩ 東京のトチヨウの前には広場がある。

二 次の文章を読んで、後の問い合わせに答えなさい。

死なないA-Iとヒトはどのように付き合えばいいのか

もう少し、^{注1}A-Iと共存していく社会について、考えてみましょう。A-Iは何らかの答えを出してくれますが、その答えが正しいかどうかの検証をヒトがするのが難しいというところが、まず問題です。大切なことは、何をA-Iに頼つて、何をヒトが決めるのかを、しっかりと区別することでしょう。

データをコンピュータに学習させて、それを基に分析を行なう機械学習のようなA-Iは、過去の事例からの条件（重み付け）にあつた最適な答えを導き出すので、その学習データの質で答えが変わってきます。画像診断のように「答えを知っている」医師の判断を見落としなどがないように助ける道具としては十分に役立ちます。ただ、例えば過去の事例にないケースの判断は難しいです。

機械学習型ではなく、SF映画に登場するヒトのように考える汎用型人工知能はどうでしょうか？まだ開発途中ですが、さまざまな局面でヒトの強力な相談相手になることが期待されています。こちらは使い方を間違うと、かなり危険だと思っています。なぜなら、ヒトが人である理由、つまり「考える」ということが激減する可能性があるからです。一度考えることをやめた人類は、それがこそA-Iに頼り続け、「主体の逆転」が起ります。^{注2}ヒトのために作ったはずのA-Iに、ヒトが従属してしまうのです。ではそうならないようにするには、どうすればいいのでしょうか。私の意見としては、決して「ヒトの手助け」以上にA-Iを頼つてはいけないと思います。あくまでA-Iはツール（道具）で、それを使う主体はリアルなヒトであるべきです。

いや、A-Iのほうが賢明な判断をしてくれるよ」とおっしゃる方もおられるでしょう。しかし、それは時と場合によります。いつも正しい答えが得られるという状況は、ヒトの考える能力を低下させます。ヒトは A 、つまり間違えることから学ぶことを成長と捉え、それを「楽しんで」きたのです。喜劇のコントの基本は間違えて笑いを誘い、最後はその間違いに気づくことが面白いのです。逆に「悲劇」は、取り返しがつかない運命に永遠に縛られることに、恐怖と悲しみを覚えるのではないでしようか。

A-Iは、人を楽しませる面白い「ゲーム」を提供するかもしれません。しかし、リアルな世界では、A-Iはヒトを悲劇の方向に導

く可能性があります。^③そして何よりも私が問題だと考えるのは、A-Iは死はないということです。

私たちは、たくさん勉強しても、死んでゼロになります。文化や文明を継承するために教育に時間をかけ、次世代を育てます。一世代^{注6}ごとにリセットされるわけです。死なないA-Iにはそれもなく、無限にバージョンアップを繰り返します。

私は1963年の生まれで、大学生の時（1984年）にアップル社からマッキントッシュ（Mac）のコンピュータが発売され、その後ウインドウズが誕生したのを体験してきました。ゲームも、フロッピーディスクに入った「テトリス」を8インチの白黒画面でハイスクアを競つたものです。その後のパソコン、ゲーム機、スマホなどの急速な進歩は、本当に驚きです。

私はコンピュータの急成長も可能性^{注8}も脆弱性^{注9}も知っている「生みの親」世代です。そしてコンピュータが「生みの親」より賢くなつていくを体感しています。だからこそA-Iの危険性、つまりこのままいつたら絶対にやばいと直感的にわかるのかもしれません。そんな私でも自分の子供の世代には警鐘^{注10}を鳴らせますが、孫の世代はどうでしょうか。孫たちにとってはヒト（親）の能力をはるかに凌駕^{注11}したコンピュータが生まれながらにして存在するのです。タブレットで読み・書き・計算を教わり、私情が入らないようになると先生代わりのA-Iが成績をつけるという時代にならないとも限りません。そんな孫の世代にとつては、A-Iの危険性より信頼感のほうが大きくなるのは当然です。

死なないA-Iは、私たち人間と違つて世代を超えて、進歩していきます。一方、私たちの寿命^{注12}と能力では、もはや複雑すぎるA-Iの仕組みを理解することも難しくなるかもしれませんね。人類は1つの能力が変化するのに何万年もかかります。その人類が自分たちでコントロールすることができないものを、作り出してしまったのでしょうか。

ヒトが人であり続けるために

進歩したA-Iは、もはや機械ではありません。ヒトが人格^{注13}を与えた「エイリアン」のようなものです。しかも死にません。どんどん私たちが理解できない存在になつていく可能性があります。

死^④ない人格と共存することは難しいです。例えば、身近に死なないヒトがいたら、と想像してみてください。その人とは、価値

観も人生の悲哀^{ひあい}も共有できないと思います。非常に進歩したA-Iとはそのような存在になるのかもしれません。

多くの知識を溜め込み、いつも合理的な答えを出してくれるA-Iに対し、人間が従属的な関係になつてしまふ可能性があります。

私たちがちようど自分たちより寿命の短い昆虫^{昆蟲}などの生き物に抱くような、ある種の「優越感^{ゆうえきかん}」と逆の感情を持つのかもしれません。

「A-Iは偉大^{偉大だ}だな」というような。

ヒトには寿命があり、いざれ死にます。そして、世代を経てゆっくりと変化していく——それをいつも主体的に繰り返してきましたし、これからもそうあることで、存在し続けていけるのです。A-Iが、逆に人という存在を見つめ直すいい機会を与えてくれるかもしれません。生き物は全て有限な命を持つていてからこそ、「生きる価値」を共有することができるのです。

同様にヒトに影響力^{えいきょうりょく}があり、且つ存在し続けるものに、宗教^{宗敎}があります。もともとその宗教を始めた開祖は死んでしまっていても、その教えは生き続ける場合があります。そういう意味では死にません。

ヒトは病気もしますし、歳を重ねると老化もします。ときには気弱になることもあります。そのようなときに死がない、しかも多くの人が信じている絶対的なものに頼るうとするのは、ある意味理解できることです。A-Iも将来、宗教と同じようにヒトに大きな影響を与える存在になるかもしれません。

宗教は、付き合い方を間違うと、戦争やテロにつながるのは歴史から存じの通りです。ただ、宗教のいいところは、個人が自らの価値観で評価できることです。それを信じるかどうかの判断は、自分で決められます。それに対してA-Iは、ある意味ヒトよりも理的な答えを出すようにプログラムされています。ただ、その結論に至つた過程を理解することができないので、人がA-Iの答えを評価することが難しいのです。「A-Iが言つてるのでそうしましよう」となつてしまいかねません。何も考えずに、ただ服従してしまうかもしれないのです。

それではヒトがA-Iに頼りすぎずに、人らしく B を繰り返して楽しく生きていくにはどうすればいいのでしょうか？

その答えは、私たち自身にあると思います。つまり私たち「人」とはどういう存在なのか、ヒトが人である理由をしっかりと理解することが、その解決策になるでしょう。

人を本当の意味で理解したヒトが作ったA-Iは、人のためになる、共存可能なA-Iになるのかもしれません。そして本当に優れたA-Iは、私たちよりもヒトを理解できるかもしれません。さて、そのときに、その本当に優れたA-Iは一体どのような答えを出すのでしょうか？——もしかしたらA-Iは自分で自分を殺す（破壊する）⁽⁶⁾かもしれませんね、人の存在を守るために。

（小林武彦『生物はなぜ死ぬのか』講談社より）

注1 A-I……人工知能を意味する「artificial intelligence」の略称。

注2 汎用型人工知能……「」では人工知能の中の、特に人間と同じような思考回路や柔軟性をもつむの「」。

注3 バージョンアップ……性能や機能を改良・向上させる「」。

注4 アップル社……アメリカのテクノロジー企業の「」。

注5 マッキントッシュ……アップル社が開発を続けているパソコンの「」。

注6 ウィンドウズ……アメリカのマイクロソフト社が提供している、コンピュータを動かすための基本システム（OS）の名称。

注7 フロッピーディスク……情報を記録するための装置の「」。

注8 脆弱性……もろくて弱い性質のこと。「」ではコンピュータやソフトウェアの、プログラムミスや設計上のミスが原因となって発生する欠陥のこと。

注9 警鐘……危険を予告し、警戒を促すもの。

注10 エイリアン……「」では理解不能な存在のこと。

- 問1 ——①「A-Iと共存していく社会」とありますが、どのようなA-Iであれば人と「共存」できるかも知れないと筆者は考えていますか。本文中から二十字でぬき出し、はじめの五字を答えなさい。
- 問2 ——②「ヒトのために作ったはずのA-Iに、ヒトが従属してしまうのです」とありますが、「これはどういうことですか。八十字以内で説明しなさい。

問3

A・Bに共通して入る四字熟語を次の□から選び、記号で答えなさい。

ア 切磋琢磨

イ 一球入魂

ウ 晴耕雨読

エ 試行錯誤

オ 有言実行

- 問4 ——③「そして何よりも私が問題だと考えるのは、A-Iは死がない」と「」です」とありますが、なぜ筆者はそれが「問題」だと考えていますか。その理由として最もふさわしいものを次の□から選び、記号で答えなさい。

- ア A-Iが死なないことで神と同じような絶対的な存在になってしまい、人間を支配してしまう可能性があるから。
イ コンピュータと同様に、A-Iが死なないことで知識を獲得し「生みの親」より賢くなる様を、実際に見てきた経験があるから。
ウ 誕生した段階すでに高度なA-Iが存在する世代の人間は、A-Iに追いつくために相当な努力が必要になってしまふから。
エ 死がないA-Iは仕組みがどんどん複雑になるため、A-Iに対する信頼感よりも危険性を感じることの方が多くなるから。
オ A-Iは世代を超えて進歩を繰り返せるが、人間は一世代⁽⁷⁾ごとにリセットされてしまい、A-Iへの理解が難しくなる可能性があるから。

問5 ——④「死なない人格と共存することは難しい」とあります。筆者がそう考える理由をまとめた次の文の空欄に入る言葉を本文中から十四字でぬき出して答えなさい。ただし、記号や読点も一字として数えなさい。

死なない人格を持つ存在に対しては人間が従属的になってしまふ可能性があるし、 ができないから。

問6 ——⑤「宗教」についての筆者の説明としてふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 人間が自らの考えを元に信仰するかしないかの判断を下せるもの。

イ 開祖が死んでしまうと急速に人間に対する影響力を失うもの。

ウ 人間に對してA-Iよりも合理的な答えを与えてくれるもの。

エ 減びはするが人間の一生に影響を与える続けるもの。

オ 付き合い方次第では戦争やテロにつながってしまうかねないもの。

問7 ——⑥「A-Iは自分で自分を殺す（破壊する）」とあります。このことについて話し合っている次の獨太君と協平君の会話文を読み、後の（1）と（2）の問いに答えなさい。

獨太 筆者はなんで「A-I」が「自分で自分を殺す」なんていう選択をする可能性を考えているんだろうね。

協平 ぼくはこう考えたよ。すぐ進化したA-Iは、自分がいつも合理的な答えを出してしまふと人間がI、つまり劣等感のやうなものを抱いてしまうから、自分の存在が人間の成長を妨げてしまうと推測するということなんじゃないかな。

獨太 なるほどなあ。おおむねぼくも協平君の意見に賛成だけど、ぼくは「自分で殺す」という表現の方も気になつたよ。

協平 どんなどころが気になつたの？

獨太 つまりね、 II

協平 それは面白い視点だね。

(1) 会話文中の I にあてはまる言葉を本文中から十四字でぬき出し、はじめの五字を答えなさい。

(2) 会話文中の II にあてはまる言葉として、最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 「自分で自分を殺す」っていふのは一種の慣用句的な表現で、過去の自分から解放されるという意味に読み取れるんじゃないかな。だからこの表現は、進化したA-Iは人間の支配から逃れて自由になることを表しているんだと思うよ。

イ 筆者は進歩したA-Iを「エイリアン」とも表現しているから、人間から見たときに理解不能な存在だということを言うために、「自分で自分を殺す」なんていう過激な表現を持ち出しているんじゃないかな。

ウ 「自分で自分を殺す」という言葉の慣用句的な意味を考えると、A-Iが自分の能力を制限する、という意味もあるんじゃないかな。まあ、直後に「（破壊する）」と続いているから、進化したA-Iが人間のために自分を破壊するという意味に普通は取るけどね。

エ ぼくは「自分で自分を殺す」という表現を考えるのに、筆者がしている宗教の話に注目したんだ。開祖が死んでも教えが生き続けるように、自分を破壊すれば自分の影響力が強くなるとA-Iが判断して、それを行動に移すという意味じやないかと考えたよ。

二 次の文章を読んで、後の問い合わせに答えなさい。

小学四年生の香音は、一週間前に日本最難関とされる学生ピアノコンクールで予選敗退した。その結果に落ち込む母親の姿を見て以来、香音が弾くピアノの音から元気が失われた。そんな音を出す自分に耐えられない香音は、南先生のレッスンをさぼってしまう。そんな時あるオルゴール店に入った香音は、客の心に流れる音楽を感じ取る不思議な力を持つ店員から、好きなオルゴールをひとつ持つて帰るよう勧められた。香音はオルゴールのメロディーを聴きながら、昨日母親から、南先生以外の先生にピアノを習うことを提案された時の悔しさを思い出していた。

「気に入ったもの、ありましたか」

店員さんから声をかけられて、香音はわれに返った。聴き終えたオルゴールが、テーブルの上にばらばらと散乱している。

「すみません、ちょっとまだ」

香音は **I** してうつむいた。気を散らしてばかりで、身を入れて選んでいないのがわかつてしまつただろうか。ただで持つていいと氣前よくすすめてくれたのに、気を悪くしたのかもしれない。

「少々、お待ち下さい」

無言で香音を見下ろしていた店員さんが、唐突に言った。

耳もとに手をやつて、長めの髪をかきあげる。かたちのいい左右の耳に、透明な器具のようなものがひつかついていることに、香音はじめて気づいた。

彼はてきぱきと器具をはずし、テーブルの上に置いた。「これ、と軽い音がした。素材はプラスチックだろうか。めがねの端っこをばつんと切り落としたような、ゆるいカーヴのついたつるの先に、耳栓に似たまるい部品がくつついている。

変わった器具について見入っている香音を置いて、店員さんは棚のほうへ歩いていった。新たなオルゴールをひとつ手にとつて、

――――――

戻つてくる。

「これはいかがですか」

自らぜんまいを回してみせる。流れ出したメロディーを聴いて、あつと香音は声を上げてしまった。

「① 読美歌？」

ついさつき、教会でひさびさに思い返していた曲だった。^{注1}聖歌隊の十八番で、日曜礼拝でたびたび伴奏したのだ。

安らかな日々だった。コンクールのことも、南先生のことも、知らなかつた。^{注2}鍵盤に指を走らせるのが、ただただ楽しかつた。幼稚園の先生にも、友達やその親たちにも感嘆され、聖歌隊からは感謝され、礼拝の参列者の間でも評判だつた。香音ちゃんのピアノは神様の贈りものだ、と園長先生は感慨深げに言つたものだ。大切にしなさい。その力はみんなを幸せにするからね。

オルゴールがとまるのを待つて、香音は口を開いた。

「これ、下さい」

「よかったです。実は僕も、耳は悪くないんです」

店員さんは **A** を細め、香音にうなずきかけた。

「すぐいい音で鳴つている」

いい音ね。不意に、南先生の声が香音の耳もとで響いた。ぎゅう、と胸が苦しくなつた。

「紙箱があるので、入れますね」

店員さんが腰を上げた。耳の中できだましている先生の声は気にしないようにして、香音も笑顔をこしらえる。

そこで突然、彼が眉をひそめた。

「ん？」

中腰の姿勢で **II** と見つめられ、香音はどぎまきして目をふせた。作り笑いが失敗していただろうか。

「あともうひとつだけ、いいですか」

香音の返事を待たずに、店員さんはせかせかと棚のほうへ歩いていく。

【*】

店を出ると、香音は急いで先生の家へ向かった。途中から、ほとんど駆け足になっていた。門が見えたときには汗だくで、息がはずんでいた。

そのまま駆け寄らうとして、⁽³⁾ つんのめりそうになつた。道の先に、香音に負けず劣らず息をきらして走つてくる人影が見えたのだ。

「香音！」

見たこともないようなこわい顔をして駆けてきたお母さんは、立ちすくんでいる香音の前で X 立ちになった。

香音は無言でうなだれた。足もとのぐるぐるとした影が、穴みたいに見える。いつそ飛びこんでしまいたい。

「どれだけ心配したと思つてゐるの？」

頭の上から降つてきた声は、頼りなく震えていた。

香音はびっくりして顔を上げた。お母さんは怒つていても、途方に暮れたような顔つきになつていて。

「先生も心配してらしたわよ。今までどこにいたの？」

香音がレッスンに来ないと電話を受けて、探しにきたらしい。

「(めんなさい)

「ねえ、香音。ピアノ、弾きたくないの？」

香音は目をみはり、お母さんを見上げた。

「さうき、電話で先生と少しお話したの。ちょっとお休みしてもいいんじゃないかなって。先週、香音ともそういう話をしたんだつて？」

「ピアノを習つておられるんですか」

店員さんは優しい声で言つた。

「はい」

お母さんが膝を折つて香音と目線を合わせた。

「お願い。正直に教えて。お母さん、怒らないから。香音のやりたいようにやつてほしいと思つてる」

肩からかけたかばんを、香音は手のひらで軽くなつた。底のほうがぽこりとふくれてゐるのは、角ばつた紙箱のせいだ。

店員さんが新しく棚から出してきてくれたオルゴールを聴いて、香音は息をのんだ。^{注4} バツハでも讃美歌でもない、けれどよく知つ

ている曲が、またもや流れ出したのだった。

「ピアノを習つておられるんですか」

店員さんは優しい声で言つた。

「はい」

でも、と言い足すなんて、ふだんの香音なら考えられない」とだつた。見ず知らずのおとなに、個人的な打ち明け話をするなんて。

このひとになら、わかつてもらえるのではないかと思つたのだ。香音の胸の奥底で響いてゐる音楽をみごとに聴きとつてみせた、彼になら。

コンクールで落選したこと、ピアノを弾く気力を失つてゐること、今日レッスンをすっぽかしてしまつたことまで、つつかえつつかえ話した。店員さんはなにも言わずに耳を傾けてくれた。それから、ふたつのオルゴールをテーブルに並べ直した。

「どちらでも好きなほうを、どうぞ」

香音は左右のオルゴールを見比べた。洗いざらい話したせいか、いくらか心は軽くなつていた。

深く息を吐き、耳をします。

「(めんなさい)」

新しく出してもらつたほうを、指さした。店員さんが満足そうに B もとをほりうらせ、香音が選んだオルゴールを手にとつて、

ぜんまいを巻いた。

^{注5} 素朴なバイエルの旋律が、香音の耳にしみとおつた。

紙箱に入れてもらったオルゴールをかばんにしまうと、香音はお礼もそこそこに店を飛び出した。無性にピアノを弾きたかった。

一刻も早く鍵盤にさわりたくてたまらなかつた。

お母さんの目をじっと見て、香音は口を開く。

「わたし、ピアノを続けたい」

「わたくし、ピアノを続けたい」

誰もが一位になれるわけじゃない。先週、南先生は香音にそう言つた。ここはそういう世界だから。でも、一位になるためだけに

あのときは、ただ香音を慰めようとしているのだと思つた。でもたぶん、そろじやない。先生は純粋に、事実をありのまま伝え

てくれていた。

「もつとうまくなりたいの」

そしてもう一度、いい音を取り戻したい。

先生の言つ「そういう世界」に飛び「もう」と、香音は自分で決めたのだ。いい音ね、とあの日ほめてもらつた瞬間に。

「わかった」

お母さんが香音の頭をひとなでして、腰を伸ばした。

「じゃあ、一緒に先生に謝ろう」

香音はお母さんと並んで、門へと足を踏み出した。どこからか、バイエルの調べが聞こえてくる。

(滝羽麻子『ありえないほどうるさいオルゴール店』幻冬舎より)

問1 □ I・IIに入る言葉の組み合わせとして最もふさわしいものを次のア～カの中から選び、記号で答えなさい。

- | | | | | |
|---|---|------|----|------|
| ア | I | じりじり | II | まじまじ |
| イ | I | じりじり | II | おずおず |
| ウ | I | ひやひや | II | おずおず |
| エ | I | ひやひや | II | しげしげ |
| オ | I | むかむか | II | しげしげ |
| カ | I | むかむか | II | まじまじ |

注1 聖歌隊……キリスト教の教会に属し、聖歌を歌う合唱団。教会の運営する幼稚園に通う香音は、大人の聖歌隊から伴奏を頼まれることもあった。

注2 十八番……最も得意とするもの。

注3 いい音ね……香音が南先生と初めて会つてF・バイエルという作曲家の曲を弾いた直後に、南先生が微笑みながら香音に対して言つた言葉。

注4 バッハ……では、作曲家であるJ・S・バッハの作った曲を指す。香音は一週間前のコンクールで、バッハの曲を弾いている。その曲の旋律がオルゴール店から聞こえた気がして、香音はオルゴール店に近寄つた。

注5 バイエル……F・バイエルの作った、ピアノの初心者向けの曲。バイエルを弾く香音の音を聴いて、南先生はレッスンを引き受けた。

問2 ——①とあります、「讃美歌」は現在の香音にとってどのようなものだと考えられますか。その説明として最もふさわしい

ものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 初めて南先生に出会った日のことを思い出させて胸を苦しくさせる曲。

イ どんな悩みがあつても神様が助けてくれると思わせてくれる曲。

ウ 自分がピアノを楽しく弾いていた頃を思い出させてくれる曲。

エ コンクールで優勝できるくらいのピアノの実力が自分にあることを教えてくれる曲。

オ 宗教の枠を越えて、全ての人々を笑顔にする力を持つている曲。

□ A・Bに共通して入る、体の一部を表す漢字一字を答えなさい。

問3

問4 ——②とありますが、この後香音はピアノに関してどのような思いを抱くことになりますか。四十五字以内で答えなさい。

問5 ——③の意味として最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 驚いて息をとめそうになった。

イ 気分が悪く吐きそうになった。

ウ びっくりして声が出そうになった。

エ 障害物にぶつかりそうになった。

オ 前へ勢いよく倒れそうになった。

問6 □に入る言葉を次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 閻魔えんま イ 仁王 ウ 観音 エ 鬼おに オ 仏

問7 ——④とありますが、香音が「びっくり」した理由を、五十字以内で答えなさい。

問8 【*】以降の文章から、オルゴール店での回想場面が始まる部分を探し、はじめの六字をぬき出して答えなさい。

問9 次の各文について、本文の内容に合っているものには○を、合っていないものには×をつけなさい。

ア 香音は、店員が自身の耳に透明な器具をひっかけることで、客の心に流れる音楽を聴いていることに気付いた。

イ 香音は、自分の気持ちをわかつてくれそうな店員に心を許し、この二週間で自分の身に起きたことを話した。

ウ 店員は、香音の気に入りそうなオルゴールを勧めはするが、どれを持ち帰るかの選択は香音に委ねている。

エ 母親は、「ピアノ、弾きたくないの?」と問いつめる」と、香音に「ピアノを続けたい」と無理矢理言わせた。

オ 店員は、オルゴールとしての質の高さを理由に、バイエルの曲のオルゴールを選ぶ香音の耳を、誇らしく思った。

カ 母親は、香音の気持ちを大事にしており、一緒に南先生に謝ろうとするなど、香音の決断を応援している。

このページに設問はありません

このページに設問はありません